

幸福格差社会か幸福平等社会か： 社会学における幸福感研究

小林 盾 成蹊大学 文学部教授



1. フィリピン人、インドネシア人の幸福

どうすれば、人は幸せになれるのだろうか。なにが、我われの幸福を決めているのだろうか。2016年2～3月、フィリピンとインドネシアで、「現在どれくらい幸福か、それはなぜか」をインタビューする機会があった。フィリピンでは首都マニラ近郊、インドネシアでは古都ジョグジャカルタ近郊にて、各国10人ほどで、できるだけ教育、職業、収入などが多様になるようにした(図1)。

どちらの国も、現在急速に経済発展中で、人口も増えている。そのため貧富の差が拡大し、幸福と感じる人と不幸とを感じる人に二極化しているのではと予想していた。しかし、予想に反し、ほぼすべての人が「自分は今幸せだ」と答えた。とくにフィリピンでは、(アジアのラテン系ともいえる国民性ゆえか)「とても」幸せだと強調する人が多かった。インドネシア人は、日本人と似て中庸を好むようで、「とても幸せというよりは、普通に幸せだ」という人がほとんどだった。



図1 (左) フィリピンでのインタビュー対象者、(右) インドネシアでのインタビュー対象者(一番右が筆者)

ここで重要なのは、小学校卒業後すぐに働いた人も大卒の人も、現在無職でも学生でも会社員でも、等しく幸せを感じているということである。世帯収入に10倍の差があっても、幸福であることに違いはなかった。いわば、人びとは「平等に幸福」だった。

これは、一見すると「だれもが幸せなのだから、望ましい状況だ」と思えるかもしれない。しかし、本当にそうなのだろうか。



2. 幸福のネジ（規定要因）を探す

多くの人には「幸せになりたい」と願い、多くの社会は「幸福な社会を実現したい」と努力していることだろう。古くは古代ギリシアの哲学者アリストテレスが、「幸福（エウダイモニア）こそ人びとが追求すべき最高の徳（アレテー）である」と捉えた（『ニコマコス倫理学』）。そうであるなら、幸福とは豊かな生き方、豊かな社会を考へるとき、もしかしたら最終目標となるものなのかもしれない。

では、どのような客観的条件が満たされれば、幸せという主観的帰結を得ることができるだろうか。そうした条件（社会科学では「規定要因」という）を、ここでは

「ネジ」と呼んでみよう（吉川徹、2014、『現代日本の「社会の心」』有斐閣より）。どのようなネジを巻けば、人びとの幸福感が上昇したり減少したりするのだろうか。

機械であれば、ネジから締結までのメカニズムがはっきりしている。たとえば、機械式時計なら、どんなに複雑であっても、故障していないかぎり「ネジを巻けばゼンマイを通して針が進む」ことに違いはない。しかし、人間ははるかに複雑である。同じ地域に住んでいても、同じような家族構成でも、同じ給料をもらっていても、幸福感が一致するとはかぎらないだろう。

だからといって、完全に個人の事情で幸福感が決まっているかという点、そうでもないようだ。これまで、幸福のネジにおおむねビッグ7があることが分かっている（効果の高いものから家族、家計、雇用、友人、健康、自由、価値観）。そこで、ここでは私のこれまでの幸福研究から、とくに社会学らしいアプローチを紹介したい。以下は、行動経済学会にて「社会学における幸福感研究へのアプローチ：幸せのネジはなにか」として講演したものをベースにしている（オーガナイザ筒井義郎、2015年11月28日、行動経済学会ウェブサイト当日のスライドがある）。



3. 幸福と満足は同じネジを持つのか

しばしば、生活満足度をもって人びとの幸福感の代理指標とするなど、幸福感と満足度は同じようなものとみなされてきた。しかし、その保証はない。

実際、世界価値観調査によれば、日本社会で1990年から2000年にかけて、幸福な人は82.9%から89.2%へと増加したが、生活に満足している人はむしろ74.7%から71.7%へと減少した（それぞれ選択肢の上半分の合計）。2010年の世界価値観調査（対象は2,314人）では、「不満だが幸福な人」が全体の14.4%、「満足だが不幸な人」は2.1%いた。このように、幸福感と満足度が一致するとは限らない。なぜだろうか。

ただし、世界価値観調査で幸福感は4段階、満足度は10段階で質問されており、直接比較することができなかった。そこで、私はランダム・サンプリング調査を行い（対象は東京都西東京市の284人、2014年実施）、質問文と選択肢を揃えることで、幸福感と満足度のネジを探った。

分析の結果、教育が高くなると幸福感が有意に上昇した（ロジスティック回帰分析で統計的に意味のある効果を持った）。一方、満足度は収入が高くなるほど有意に上

昇した。このとき、収入は幸福感に影響せず、教育は満足度を変えなかった。

したがって、幸福と満足のネジは異なることが分かった（統計学では「規定要因が異なる」という）。教育という長期間不変の条件が、幸福のネジとなっていた。たいして、満足では（数年など）短期で変化しうる収入が、ネジとなって左右していた。いわば、幸福と満足は「よく似た姉妹」で、似てはいるが異なるものだったのである（出典は小林盾、カローラ・ホメリヒ、見田朱子、2015年「なぜ幸福と満足は一致しないのか」『成蹊大学文学部紀要』収録）。



4. 幸福と不幸は同じネジを持つのか

そもそも、幸福と不幸は同じネジを持つのだろうか。これまで、不幸と幸福は一直線上にあり、「不幸でなくなれば幸福になるだろう」と考えられてきた。本当だろうか。

そこで、私は日本全国でのランダム・サンプリング調査で幸福感について質問し、比較してみた（2015年第1回SSP調査、通称SSP2015調査、対象は3,566人、2015年実施）。幸福感を、0とても不幸から10とても幸せまで11段階で質問した。

平均は6.8で、5と8に2つの山（ピーク）が

あり、6が谷となっていた（図2）。そのため、人びとを幸福感0～5の「不幸グループ」、6の「中間グループ」、7～10の「幸福グループ」の3つに分けた。そのうえで、不幸グループが中間グループに移るためのネジと、中間グループが幸福グループに移行するためのネジを、多項ロジスティック回帰という統計手法で分析した。

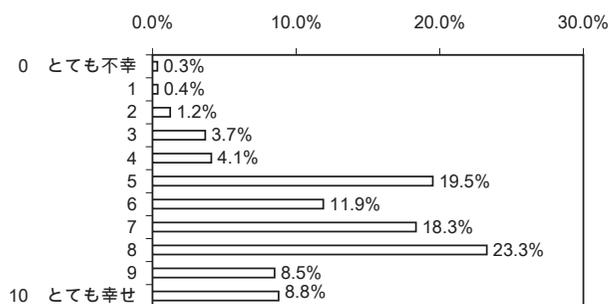


図2 SSP2015調査における幸福感の分布

すると、教育が高い人ほど、また等価所得が高い人ほど、不幸グループから中間グループへと有意に移動した。一方、教育が上がると、かえって幸福グループの人は中間グループへと有意に転落した。等価所得は、幸福グループに影響しなかった。

このように、幸福と不幸のネジは異なっていた。とくに学歴が上がると、不幸な人は減るが、同時に幸福な人も減ってしまうことが分かった。幸福にとって、教育はいわば「諸刃の剣」といえる。

トルストイの『アンナ・カレーニナ』は

「幸福な家庭はどれも似たものだが、不幸な家庭はいずれもそれぞれに不幸なものである」で始まる（岩波文庫）。分析結果からはむしろ、「不幸な人はネジが明確なため似かよるが、幸福な人は不明確なため多様である」といえそうだ。そのため、不幸な人を減らすための支援と、幸福な人を増やすためのものとは、おのずから異なるはずであ

ろう（出典は小林盾、カローラ・ホメリヒ、2016年「幸福と不幸は同じ規定要因をもつのか」数理社会学会報告）。

5. 嗜好品はネジか

それでは、ビッグ7や教育以外に、どのようなネジがあるだろうか。そこで、東京都西東京市でランダム・サンプリング調査を実施して調べてみた（対象は294人、2011年実施）。嗜好品として、飲み物のうち「緑茶、ほうじ茶、玄米茶」「コーヒー」「紅茶」「炭酸飲料（コーラなど）」「牛乳」「野菜・果物ジュース」を月1回以上飲むか、お酒のうち「ビール」「焼酎」「日本酒」「シャンパン、ワイン」「ウイスキー、ブランデー」「梅酒、サワー、カクテル」を普段飲むか、さらに「タバコ」を吸うかを質問した。こうした嗜

好品をたしなんでいる人のグループとそうでないグループとで、それぞれ幸福感に違いがあるのかを、カイ二乗検定という統計手法で比較した。

その結果、コーヒー、炭酸飲料、牛乳を飲む人ほど、そうでない人より幸福と有意に感じていた。それ以外の嗜好品では、幸福度に違いがなかった。

したがって、嗜好品のうち一部の飲み物はたしかに、人びとを幸せにするネジといえる。ただし、それ以外はネジとはいえないようだが、かといって幸福感をとくに下げるわけでもなかった。つまり、嗜好品は人を幸福にすることはあるが、不幸にすることはないようだ。

6. ネジの効く「幸福格差社会」、効かない「幸福平等社会」

最後に、もし「ネジがよく効く社会」と、フィリピンやインドネシアのように「ネジがあまり効かない社会」があるとしたら、どちらがより豊かな社会で、人びとのより豊かな生き方を育むのだろうか。それぞれ極端な場合を想像してみよう。

まず、教育や収入といったネジで、幸福が完全に決まってしまうとしたら、どうだろうか。そうした社会では、教育が高く、

よい仕事に就き、収入が多く、家族や友人に恵まれた人ほど、幸せを感じることができる。逆にいえば、そうでない人は幸せになれず、不幸を感じざるをえない。

これは幸福にまで格差が広がって、社会階層上の勝者が幸福までも「総取り」するような社会である。いわば「幸福格差社会」だ（図3左）。

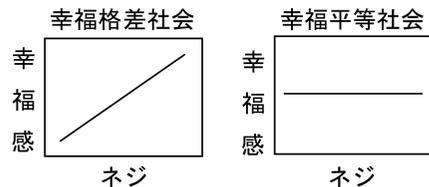


図3 (左) 幸福格差社会、(右) 幸福平等社会におけるネジと幸福感の関係（ネジとは教育や収入といった規定要因）

では、ネジがまったく効かず、すべての人が等しく幸福を感じるとしたら、どうか。収入があってもなくても、家族がいてもいなくても、人々が幸せになれるような社会である。このとき、幸福に格差はなく、だれもが幸せを実感できる。いわば「幸福平等社会」といえよう（図3右）。

ともすれば、幸福平等社会は理想的な社会のあり方に見えるかもしれない。しかし、幸福平等社会とは、幸福における社会主義のようなものである。ネジが効かないということは、どんなに勉強や仕事を頑張り、家族や地域でよりよい人間関係を築いて

いっても、けっして（現在より）幸せになれないということを意味する。努力が空回りし、報われない社会といえるだろう。また、頑張らなくても幸せを感じることができるとは、はたして人びとは努力をあえてするのか、心もとない。

これにたいし、幸福格差社会では、幸福における資本主義のようなものかもしれない。たしかに幸福な人も不幸な人もいるが、頑張れば幸せになれるのである。どちらがより望ましい社会であるかは、自明ではないだろう。



7. ブータンは理想の社会か

ブータンは国内総生産（Gross Domestic Product）より国内総幸福（Gross National Happiness）を、国の発展の指標として優先させているという。前王は「（経済的に）豊かであることがかならずしも幸せではないが、幸せであるとだんだん豊かだと感じるようになる」と主張する（ブータン政府観光局ウェブサイトより）。

経済より幸福。耳障りはよいが、私は強い違和感を持たざるをえない。たとえ人びとが経済状況に不満を持ったとしても、前王の言葉は「あなたたちは幸せなのだから、

いくら貧しくてもいいでしょ」と、人びとに我慢を強いることを正当化する根拠に、容易に転化しかねない。

そうだとすれば、「経済も幸福も」追求することが、豊かな社会のための条件といえそう。そうした社会では、人びとは経済と幸福の関心に敏感にならざるをえないだろう。そのため、ネジの効かない幸福平等社会というよりは、ネジがある程度効く幸福格差社会となるかもしれない。しかし、そうした社会でこそはじめて、人びとの間に多様性や緊張感が生まれよう。その結果、各個人の長所が十全に引き出され、人びとが豊かな生き方を実現できるように思う。

[付記] 本研究はJSPS科研費JP16H02045の助成を受けて、SSPプロジェクト (<http://ssp.hus.osaka-u.ac.jp/>) の一環として行われたものである。SSP2015データの使用にあたってはSSPプロジェクトの許可を得た。

プロフィール.....
こばやし・じゅん 東京大学文学部卒業。シカゴ大学社会学部博士候補。修士（社会学）。現在、成蹊大学文学部現代社会学科教授、主任。専門は数理・計量社会学、社会的不平等、文化。主な著書は、『アクティブ・ラーニング入門』、『数理社会学の理論と方法』、『ライフスタイルとライフコース』、『データで読む日本文化』、『社会学入門』、『ソーシャル・メディアでつながる大学教育』、『社会調査の応用』、『社会をモデルでみる』など。